

私にとって多文化共生とは？

林 英文

地域連携センターと多文化共生

平成19年4月から、地域連携に関わる仕事をしている。地域連携という言葉から、産学官連携や社会連携、社会貢献などのことが連想される。以前から、個人的な活動として行われてきたことを組織的にいき、大学が社会を元気づける活動の一つとして位置付けられている。多文化共生という、私が理工系出身ということもあり、異なる文化をもつ国の人々との共生と考えがちだが、異なる考えをもつ人たちとの共生も多文化共生と捉えるべきと思う。大学と社会との共生である地域連携も多文化共生の一つといえるだろう。このように、異なる文化をもつ人と人との結びつけを手助けするのが地域連携に関わる仕事であり、現在の仕事といえるだろう。

現場監督の経験

実は10年前まで、現場監督として建設会社に勤めていた。今や建設業界では、何らかの資格や経験がないとできないことが多い。ともすれば、怪我や、場合によっては死にいたる、危ない仕事である。そんな、「きつい」「きたない」「きけんな」仕事でも、人手が足りないからといって、身元がわからない人を直接または下請け、孫請け業者が雇うことはなかった。公共工事が集

中する冬場に人手不足となる。そのため出稼ぎに来る人を当てにしている。彼らは、ほとんどは経験者であり、初めてのものは稀であった。しかし、バブル景気後のある時（1995年くらい）下請けの舗装業者から、外国人を現場で働かせたいとが相談があった。中国から日本に勉強に来た、行政からの依頼により合法的に受け入れた複数の研修生だった。「とてもまじめで、日常的な生活面でも責任をもって面倒を見ているから、ご迷惑をおかけすることはないのでお願いしたい」と頼まれて、受け容れた。短期間の滞在で、資格を持たないため、建設機械を扱わない力仕事をさせたが、給与面では、同じ作業をする日本人作業員と変わらなかった。（今では長期滞在の外国人が増え、外国人だからといって、日本人の代わりにきつい、きたない、きけんな仕事を安い賃金で働かせている。これはおかしい話である。）後で聞いた話だが、彼ら本国では会社経営も経験し、とても優秀な人たちだったことだった。英語はもちろん話せて、休憩時間には、日本語を熱心に勉強していた。私を含め、その時、その研修生と関わった多くの方が、日本に来るのだから、意思疎通できるくらいの日本語は話して欲しいと思ったことだろう。それから、2、3年後、日系ブラジル人の男性と仕事で関わったが、現場監督の私としては同じことを感じた。

留学生チューターの経験

1998年に会社を辞め、大学・大学院と進んだ。後期課程は名古屋大学に所属したが、研究科で、主にアジアの大学を対象に、博士後期課程の学生を特別プログラムとして受け入れていた。そのため、各研究室に3、4名の留学生がいて、研究室では日本語、英語、中国語や韓国語などが飛び交っていた。ほとんどの留学生は、英語は喋れるのだが、日本に来てまもなくは日本語が喋れない。そのため日本語の授業を受けることが必修となっていた。語学を身につけるには、それなりの時間が必要で、会話として成立するには1年では難しい。しかし、個人差はあるが、博士後期に来る学生の場合、2、3年後には、日本語でコミュニケーションができるようになる。

大学内には多くの留学生がいて、外国人は珍しくないが、それほど深く関わるのがなければ、国際理解が難しいことに気付かない。が、自分が留学生の1年目のチューターとなった時は、何度か困ったと感じることがあった。チューターは生活面のサポートではなく、大学における研究活動のサポートのため、工学部国際交流室が研究室の学生に依頼しているものである。私が担当したのは、ベトナムの女性で、来日から最初の6ヶ月間であった。男ばかりの研究室にいきなりベトナム女性が飛び込んできたので、最初のうちは、どのように接したらよいか悩んだ。日本語で会話することはできないので、つたない英語で会話したが、独特の発音と普段から英語を使っていないこともあり、聞きとれず、紙に書いて

もらうことも多かった。

そのうち言葉の問題より、むしろ大きい問題と感じたのは、日本の文化や研究室のルールをどのように教えていくかであった。例えば、研究室では、単位とならない研究室のセミナーや懇親会、イベントなどがあり、日本人学生に「明日の会に参加してください」と言えば、予定がなければ参加するのが普通だ。しかし、担当した留学生に「これは私の研究に関係ないので、なぜ私が出ないといけないのか」といわれた時、啞然とした。意見の衝突になると思い、「それがここのルールだからと従いなさい」と強く言わなかった。彼女の勘違いだと思うが、その後も自分の予定を優先し、研究室のルールをなかなか理解してもらえず、結果として必修科目すら取るのを忘れてしまっていた。これは彼女の責任だとしても、研究室に来ない留学生にどのように研究活動のサポートをしたらよかったのか。私のチューターとしての失敗談一つであり、多文化共生の難しさを感じさせられたときである。

その後、彼女は研究テーマを与えられたことで、研究室に来ることが多くなり、研究室の学生との接点生まれ、相互の信頼ができ、自然と研究室の雰囲気に馴染んでいった。取り越し苦労だったと思うが、結果として、自然にそのような状況となるのを待っていたのがよかったのだろう。このように、留学生の受け入れ体制が整っていても、言葉やそれぞれの文化を理解するには十分な時間がかかる。

1990年代半ばから定住外国人が増え、定住外国人との共生は、今や親の問題から子どもの教育や就職など、問題が拡大する

とともに複雑化し、深刻となっている。そのような中で、知の拠点として、大学が多文化共生社会づくりの実践的なプログラムに向けた研究や、行政や NPO などと連携して、その成果を社会に還元することが期待

されていると思う。多文化共生研究所の設立にあたり、自分が関わりをもてた事を幸いに思うとともに、外国人労働者や留学生と関わったときの失敗を生かしたいと思う。

著者プロフィール

林英文 (Hayashi Hidefumi) 学務課学務・連携グループ 事務職員

■略歴：愛知県出身。1987年、豊田工専土木工学科卒業後、熊谷道路（株）に入社、1998年退職、愛知県立大学情報科学部地域情報科学科卒業、同大学院修士課程（情報科学）を修了、2007年、名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程（社会基盤工学専攻）を満期退学し、現職。

■これまでの研究：修士論文「伊勢湾・三河湾の海水交換に関する研究」、主な論文「伊勢湾・三河湾の海水交換に関する数値実験」、『沿岸海洋研究』44：2（2007）

■これからの研究：沿岸域は、人と自然の共生の場であり、山、川、海への一連の流れの中で物質循環、物質輸送が行われている。沿岸域では、様々な作用により循環流が生じ、生態系を支えている。最近は、観測技術の向上により、実際の観測により循環流のメカニズムも明らかになりつつあ



海洋若手会夏の学校（2005年8月、中腰列左端）

るが、調査に膨大な費用がかかる点や漁業者の理解を必要とする欠点もある。一方、シミュレーションは膨大な費用がかかるともなく、現象を理解するツールとして有効である。そこで、伊勢湾や三河湾などの沿岸域における密度流や吹送流を考慮した、より現実に近いシミュレーションの実現に向け、研究を進めていきたいと考えている。その上で、将来有機物の物質輸送のメカニズム解明に貢献したいと考えている。

■「共生」について：海、川、流域の研究室に在籍した経験から、自然界でいう共生とは、生物多様性だと思う。川の場合、洪水が起こると今まで多数派であった種が他の種入れ替わる。また、河川敷に「わんど」とよばれる池のような水域が生じることにより、そこを棲み家にする生物が現れる。このように、川の場合、人的な作用がない限り、場を提供するのは、自然である。人間社会の場合は、場を提供するのは社会であり、川の洪水の場合と同じように、一つの社会システムが変わったとき、空いた場に入り込むのが「ニューカマー」と呼ばれる人々なのだろう。現職では、大学の地域連携に関係する団体との関わりを通して、多くの人と多文化共生、国際理解、自然との共生などについて意見交換したいと考えている。